はじめに

貴重な自然が、増えすぎたニホンジカによって被害を受けだした時期は早い所では1980年代からであるが、四国山地では2000年頃からだ。まず、西南地域の三本杭・黒尊、篠山から被害が出始め、やがて東部の剣山山系でも被害が顕著になった。よそ事と思っていたことが、地元の山々でも起き出したのだ。

早くから山林開発が進んだ高知県では、三嶺（さんれい）の森は奥山に残された随一の原生的自然といって良いほど貴重なものである。稜線部にはササ草原が発達し、中腹の自然林の林床にはササや草花がよく育ち多様な植生に恵まれていた。幽玄な雰囲気を醸し出す自然林の景観は人々にとって魅力的なものであった。ここに進出してきたシカにとって、この豊かな森は食料の宝庫と映ったに違いない。

いったんシカが増え始めて被害が出始めると、その広がりのスピードと規模は私たちの想定をはるかに超えた。三嶺の自然が急激に痛み壊れていく様を見て、私たちは 2007 年に「三嶺の森をまもるみんなの会」を結成し、保全と再生に向けて、連携協働を深め、市民・住民も参加するボランティア組織として活動を開始した。結成後、10 年を迎えるが、その間にも三嶺の森、自然は思いがけない変化を遂げる。人の力と自然の復元力によって、予想外に早く再生し、逆に、どうしようもないような壊れ方もする。

私たちは、結成 10 周年記念事業として、本冊子の刊行に取り組むこととした。冊子の構成は、①シカ食害によって痛み、変貌した山々の自然の記録、②シカ食害によって引き起こされる諸問題、③「みんなの会」の活動内容、④会のメンバーによる調査記録を掲載する形となっている。

そして最後で触れていることだが、今まさにシカ問題に直面しつつある石鎚山系など、他の山岳地の自然保護活動の参考になればとの思いで、この冊子を作成したものです。

2017 年 4 月

三嶺の森をまもるみんなの会　代表　依光良三

四国山地（公有林・緑の回廊）と三嶺の位置図

本冊子の用語、略称、三嶺山域等について

「三嶺の森をまもるみんなの会」の略称について

本文中では、「**みんなの会**」と略称する。

山地・山系・山域について

四国山地剣山山系：四国の中央部を東西に連なる 1,000m を超える急峻な山々からなっているのが四国山地。石鎚山（1,982 m）を中心とする石鎚山系、剣山（1,955 m）を中心とした剣山山系等からなっている。三嶺（1,894m）は剣山山系に属する。

三嶺山域：ここでの三嶺山域というのは、剣山山系のうち、三嶺を中心として、近隣の網付森、西熊山、白髪山などに囲まれたエリアをいう。ただし、「みんなの会」が取り組む範囲は、物部川源流域なので、高知県側の西熊渓谷（フスベヨリ谷、カンカケ谷、長笹谷域）を「**三嶺山域コアエリア**」、または「**三嶺の森コアエリア**」とする（序の図２、図５を参照）。

さらに、白髪山－白髪分岐を境としてコアエリアの東側に分布する平和丸、中東山、石立山からなる別府峡上流域（ジル沢域等）も三嶺山域に含めることとする。

三嶺（さんれい、みうね）の呼称について

徳島県や一般的には「**みうね**」だが、高知県側では「**さんれい**」という呼び方が広く用いられており、本冊子では、「さんれい」と呼ぶ。

マットについて

マット、シート、植生ネット：本冊子では統一せずに同じものとして扱う。肥料も種子も入っていない自然素材のヤシ繊維からできたもので、土壌流出防止と植生再生のために敷設している。

物部川中流・香美市香北町吉野から望む源流域の山々

（左から網付森、カヤハゲ、白髪分岐、白髪山、剣山、みやびの丘：三嶺は網付森稜線の奥に位置）